

## 占領期の南博

### — プランゲ文庫資料を中心に

川崎賢子

GHQ/SCAP (General Headquarters, the Supreme Commander for the Allied Powers 連合軍最高司令官総司令部) の検閲機関CCD (Civil Censorship Detachment 民事検閲局) が収集した資料体であるプランゲ文庫資料を中心に、占領期における南博の言説を収集し、分析する。南博は、アジア・太平洋戦争期に帰国せず、敵国人として学徒としてアメリカで終戦を迎えた。1947年春、帰国後、占領期の論壇に登場した南は、戦中から戦争終了後にかけてのアメリカを知る研究者として、アメリカに何を学ぶかを語り始めた。学界、教育界、学生生活、文化一般へと筆は自在に及んだ。より専門的には、心理学、とりわけ社会心理学のパイオニアとして論陣を張った。時事的な評論における、彼の挑発的かつ批評的な姿勢は、しばしば、CCDの検閲チェックを受けている。南はCCDとCIE (Civil Information and Education Section 民間情報教育局) を両輪とするアメリカのメディア統制を構造的に把握していた。言論人・南博と米国および占領軍との関係は、貫戦史の視角から再評価される必要がある。